琉球大学学術リポジトリ

特集：沖縄社会とディアスポラ　まえがき

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学移民研究センター 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安藤, 由美, Ando, Yoshimi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010170

特集：沖縄社会とディアスポラ

まえがき

安藤由美

本特集は、トランスナショナルな移動の結果として沖縄に居住しているエスニック・マイノリティの人々をディアスポラと位置づけ、彼らの適応のあり方や、エスニック・コミュニティの形成、沖縄の人々からの排除や差別などの、ホスト社会としての沖縄との関連性の構築について調査分析した結果を報告する[1]。ディアスポラとは、もともとはユダヤ人の追放・離散をさす概念だったが、今日では国境を越えた人の移動とコミュニティの形成を含意し、ホスト社会のグローバル化を議論する上で重要な概念となっている。

沖縄の外国人の問題は、日本本土とはかなり異なった様相を呈している。それは、まずなによりも、沖縄が戦後長い米軍統治下におかれ、沖縄に居住する外国人の圧倒的多数がアメリカ人、しかも米軍関係者であった（現在もそうである）という特殊事情のためである。そして、こうした特殊な社会歴史的背景のために、沖縄社会は、社会内部のエスニック・マイノリティの剥奪状況や民族関係を問う体験をほとんどしてこなかった。

しかしながら、現実に沖縄社会には、次にあげるような多様な外国人の存在が絶えずあった。たとえば、米軍基地関連の需要がもたらした米国以外の外国人の流入であり、米国人軍属、フィリピン人女性、インド人たちの事例がこれにあたる。また、長い間見過ごされていた、米国人男性と沖縄女性の間の子どもたち（アメラジアン）の教育の問題が近年クローズアップされている。さらに、沖縄から南米に移住した移民の子孫すなわち二世、三世が故郷に移住ないし出稼ぎで戻ってきているケースでは、ペルー人、ブラジル人の事例がある。これは、日本有数の移民送出県である沖縄の特殊性をあらわしている。もちろん、日本本土と同様に、外国人登録をしている韓国・朝鮮にルーツをもつ人びと、中国や台湾からの人びとも、少数ではあるが、いる。

上述した各エスニック・グループは、個々の移動・定着の状況に違いはあっても、ホスト社会である沖縄に完全に同化することもなく（あるいは、したくてもできず）、かといって、彼らのふるさとである国や地域に帰っていくこともままならない、きわめて不安定な状況におかれている。その意味で、まさにかれらは、ホスト社会におけるディアスポラとよぶにふさわしい。

文化人類学者J．クリフォードによれば、ディアスポラとは「一方で国民国家／同化主義的イデオロギーと構成的な緊張関係にあり、同時に他方、土着的(indigeneous)とりわけ自生的(autochthonous)主張とも緊張関係を持つ」概念とされる。ディアスポラは、純粋に安定的なカテゴリーへの帰属という枠組におさまらず、P．ギルロイによれば「起源(roots)」に向かう直線的なアイデンティティではなく「経路(routes)」という移動のプロセスによって生成された、同時に複数の場所をつなぐアイデンティティをもたらすものである[2]。

このようなディアスポラの概念を用いて、沖縄における定住外国人ないし移民先から里帰りした日系人をとらえることは、かれらの経験を理解するだけでなく、かれらを迎え入れる沖縄

をホスト社会としてみなし、その重層性や多様性を知る上で有効な戦略であると考えられる。

そして、日本本土に対するディアスポラとしての社会意識を共有している沖縄社会が、定住外国人に対してホスト社会としてふるまうとき、いったいどのような状況が在沖エスニック・マイノリティたちに対して立ち現れるのか。少なくともこれが沖縄におけるディアスポラを研究する際に含めるべき観点であり、またディアスポラ研究に対して新たな成果をもたらすと考える。

カルチュラル・スタディーズやディアスポラの研究の進展のなかで、日本本土に居住する沖縄の人々がディアスポラとして位置づけられた研究は存在する。しかし沖縄をディアスポラとしてではなく、むしろホスト社会と位置づけ、そこに移住するエスニック・マイノリティをディアスポラとしてとらえる視点を明確に打ち出した研究はまだないと言ってよく、まさに本研究はこの分野を開拓しようとするものである。

学術研究の社会的還元という点から言えば、グローバル化のなかで沖縄の多エスニック化はさらに進行しつつあるが、本研究によって明らかにされた知見が、調査対象の方々とホスト社会沖縄との関係性の改善に資するように望んでいる。

以上のような問題設定にもとづき、以下の各論文のテーマと論点を要約的に紹介しておこう。

まず、この後すぐに続く石川論文「沖縄県における出移民の歴史及び出移民要因論」では、日本一の移民送出県である沖縄県における出移民の歴史的推移をあとづけた上で、その要因を経済的要因のほか地割制廃止による新土地制度の施行、移民会社・周旋人・移民指導者の存在、徴兵忌避などの社会的要因にも着目して考察を行っている。そこから、戦後の米軍統治の土地接収などによる生活基盤が破壊といったプッシュ要因ならびに、渡航先国で親戚縁者や同郷人から得られる精神的安堵感といったプル要因の２つが指摘される。こうした沖縄からの出移民の状況は、ひるがえって、近年移民先から帰還した二世や三世の、精神的・物質的ルーツ(roots)なり経路(routes)を理解する上で欠かせないであろう。

続く、鈴木論文「沖縄におけるディアスポラの現状—ホスト社会との関係性をめぐって—」では、本プロジェクトが最初に取り組んだ平成14年度のアンケート調査およびインタビュー結果をもとに、様々な角度から、沖縄における定住外国人ならびに日系人のディアスポラ的現状が掘り起こされる。地域・生活上の諸問題、教育、労働、アイデンティティ、ネットワークなどにおける、かれらの生の声は、ホスト社会との関係性を理解する上でもっとも基礎的な資料となっている。ディアスポラである日系人・外国人とともに多様であり、日系人・外国人の間に差があることや日系人・外国人それぞれの中でもかなりの差異があること、そしてホスト社会沖縄は日系人、外国人ともに言語の問題で入り込みにくい状況にあることが明らかにされている。

３番目の崎濱論文「沖縄社会における異質性をめぐる葛藤と入り込み — 沖縄県におけるディアスポラの意識調査から — 」では、さきの鈴木論文と同じ平成14年度の調査結果をもとに、沖縄に定住するディアスポラの人たち（外国人ならびに日系人）が、どのような沖縄社会への入り込み戦略を取っているかについて、信用獲得戦略をキー概念に分析を行う。そして、そこから把握される沖縄社会における多文化共生の実態はどのようなものか、さらに、沖縄社会の信用分配の仕方はどのようなものかといった課題に取り組んでいる。その結果、ディアスポラ

たちのホスト社会との共生が職場、親戚関係、友人・知人関係という3つの場に限定されており、地域社会とのかかわりが薄いこと、そして、移民世代数や国籍といった個人的属性によって取られる信用獲得戦略が異なるといった知見が得られている。

4番目の野入論文「沖縄における国境を越えた移動とエスニック・ネットワーク」では、平成15年度に実施した調査の結果をもとに、日系人と定住外国人の沖縄への定住過程を詳細に聞き取ることによって、ホスト社会としての沖縄の現状と課題と照らし出そうと試みる。そのなかで、在沖アメリカ人については、いかに米軍基地とともに沖縄社会に君臨してきたといえども、いや、むしろそれだからこそなおさらのこと、世代内および世代間の時間経過とともに失われていくアメリカ人の特権性とひきかえに付与される、沖縄の反基地感情に根ざしたスティグマが、鮮明に浮かび上がる。また、日系移民の子孫たちとっては、沖縄に還る契機であったはずの親族ネットワークが、沖縄での定住過程においてあまり見出せないというパラドクスが、崎濱論文と同様、ここでも確認される。一方、沖縄におけるディアスポラたちのなかで異彩を放つ台湾人について、かれらの世界各国に広がる華僑の親族・知人のネットワークにつながる台湾人というエスニシティをビジネスに最大限に活かしたハイブリディティ（異種混淆）を鮮やかに描いている。

上述の日系人のうち、ペルー日系人のケースについて、その定住過程における文化変容について詳細に報告するのが、国吉論文「沖縄におけるペルー日系人の文化変容」である。かれらの家族のあり方、友人関係、エスニック・ネットワークなどの分析から、日本での多忙な生活による家族員相互で共有する時間の減少が、日系人文化の世代間での継承を妨げている反面、直接の家族以外のインフォーマルなネットワークを通して同胞との繋がりが維持されていることが明らかにされる。

最後に、金城論文「ディアスポラの記憶 － 現代沖縄社会と『移民』」では、移民送出が終了して久しい現在の沖縄において、移民の子孫であるディアスポラたちとホスト社会沖縄との間で、移民の記憶がいかに継承され、異文化理解への経験として活かされているかについて論じる。自治体やメディアが音頭をとって行われている種々のホームカミング・フェスティバルが、そうした移民の記憶をつなぎ止める装置として一定の機能を果たしている一方、沖縄自身の対本土あるいは移民先での経験に根ざすディアスポラ性を回復するためのナルシスティックな言説（たとえば「イチャリバ、チョーデー」に代表される）に容易に回収されかねないと危惧する。その戒めにもとづき、沖縄の移民経験は、異文化理解に資する可能性を模索するために活用されるべきであると締めくくられる。この主張は、沖縄におけるディアスポラとホスト社会との関係性を構築ないし修復していく上で、きわめて重要な示唆であるといえよう。

以上、本研究は、沖縄におけるディアスポラの人たちの経験とその社会文化的文脈を一定程度明らかにしえたと言ってよいだろう。とはいえ、ホスト社会沖縄との関係性についての理論的な分析は、まだほとんど手つかずのまま残されている。また、今回は問題発見的な意義を強くもった調査であったので、対象にそくした方法論は必ずしも吟味されていたわけではなかった。こうした理論・方法論的問題に加えて、日本本土における定住外国人ならびに日系人についての豊かな先行研究との比較を含めた包括的な追究が今後の課題である。加えて、多種多様なエスニック・マイノリティをかかえるホスト社会沖縄の課題解決に資するような知見を出せ

るよう、引き続き研究を続けていきたいと考える。

ー謝辞ー

まずは本調査研究の趣旨をご理解頂き、度重なるインタビューに応じてくださった調査対象者の方々に深く感謝したい。そして、調査に参加し、報告書のまとめに尽力してくれた琉球大学社会学専攻の大学院生・学生諸君の労をねぎらいたい。

注

[1] 本特集は、平成 13～15 年度文部科学省科学研究費基盤研究(C)(2)の助成を受けた研究プロジェクト（研究課題番号 13610211、「沖縄におけるディアスポラのライフコース：ホスト社会との関係性をめぐって」、研究代表者：鈴木規之琉球大学法文学部教授）の成果に基づいている。

[2] ディアスポラの概念については、本山［2001］、戴［1999］などを参考にしている。

文　献

本山謙二, 2001,「ディアスポラ／ハイブリディティ／擬態」, 姜尚中編著『ポストコロニアリズム』, 作品社, 174-175.

戴エイカ, 1999,『多文化主義とディアスポラ』, 明石書店.

（あんどう　よしみ・法文学部教授・社会学）